

## 李退溪の権力論

——朱子・李栗谷との比較を中心として——

ビョン ヨンホ  
辺 英浩

- I. はじめに
- II. 権力主体＝官僚機構
  - 1. 士禍の時代
  - 2. 李退溪
  - 3. 朱子
  - 4. 李栗谷
- III. 集権化の契機＝行政課題
  - 1. 朱子
  - 2. 李退溪と李栗谷
    - (1) 南北の外敵
    - (2) 軍制改革
    - (3) 士禍への態度
    - (4) 冊封体制
- IV. 結論

キーワード：退溪、滉、栗谷、珥、朱子、  
朱子学、権力、政治、士禍

### I. はじめに

朝鮮朱子学は「東方の朱子」と称えられた李退溪（名は滉・字は景浩・退溪は号 1501～70年）に至り完成したといわれる。そして退溪と双璧をなす同時代の李栗谷（名は珥・字は叔献・栗谷は号 1536～84年）が「十万養兵説」をはじめとした制度改革の実施を国王に強く求めたのとは異なり、退溪には政治論や制度改革的な発言はあまり見いだせない。退溪はその人生においても、34歳で科挙に合格して以降、中央官職を歴任するものの、45歳の時の「乙巳士禍」と呼ばれる流血の権力闘争を経験してより後、多くの場合官職を辞し帰郷するか、やむを得ず

官職を受ける場合でも中央官職を極力辞退し、地方官を求めた。地方において、朱子学的素養を養成するための書院建立と学問研究・講学活動に心血を注いだのである。退溪に制度改革的な議論がほとんど見られないことと、退溪が官職を辞して地方での講学活動に熱心に従事した人生の足跡からして、退溪の学問を非政治論とする理解が多く見られる。例えば、韓国の著名な儒学研究者である李祐成氏も「退溪にいたって政治と文化は一旦分離された」と評価している。

「李朝士大夫として最も名誉である文衡（弘文館と芸文館の大提学）の地位を（1568年8月に受けながら）拒絶したのは、恐らく退溪が初めてであろう。いわば、退溪は官学的アカデミズムの伝統を引き継ぐことを願わなかったのである。ところでこのような中央の清華な官職を捨てて地方の郷里へ帰り、学問と修養で人生を終えた退溪は早くから書院請願運動の主導者になり、当時各地方の書院発起と経営を異常なほど積極的に推進し、声援を送った。恐らく退溪において社会的、文化的関心は主にこの書院問題に集中していたはずである。仕宦を放棄することにより政治に関心に見えた彼が書院請願運動を通じて積極的に社会的、文化的関心を表明していたのは大変注目すべき点である。退溪にいたって政治と文化は一旦分離されたが、退溪より李朝士大夫

の性格にも変わっていく一面が生まれたのである。」<sup>(1)</sup> (括弧内は引用者。以下断りのない限り同様)

しかし朱子学の文化、道徳は五倫によって代表されるが、その内容は君臣、父子、兄弟、夫婦、朋友の間の倫理であり、科挙に及第し官僚となることにより統治者になることが理想とされるのであるから、この意味で個人道徳は政治へと連続している。従って朱子学において政治と文化・道徳の分離などということはありません。むしろ退溪学もまた、その手本となった孔子、朱子同様に理想の政治を実現するための学問、すぐれて政治学であったのではなからうか。確かに退溪の政治的発言は少なく、その中でも制度改革についての議論はほとんどなされていない。しかし少ないが確かに存在する政治論の中から退溪の政治論、権力論を抽出し、なぜに制度改革についてはほとんど言及するところがなかったのかを検討することは可能であろうし、退溪学の分析のためには必要でもある。本稿は政治思想としての李退溪学研究のための試論である。

## II. 権力主体＝官僚機構

### 1. 士禍の時代

退溪が生きた時代は過激な政治闘争、士禍の時代であった。朝鮮王朝(李氏朝鮮王朝を本稿では朝鮮王朝と表記する)建国後、権力担当者となったいわゆる勲旧派がやがて私利追求を強めていくや、地方出身の中小地主層を多く含む士林派と呼ばれる朱子学者たちの勢力が、勲旧派の私利追求に対して批判を強めていった。こうして士禍と呼ばれる、勲旧派による士林派への報復、流血の弾圧がたびたび起こったのである。李退溪もまた士林派の代表的な人物であった。4大士禍である「戊午士禍」(燕山君4年、1498年)、「甲子士禍」(燕山君10年、1504年)、「己卯士禍」(中宗14年、1520年)、「乙巳士禍」(明宗元年、1545年)をはじめとして、「丁未の壁上の獄」(明宗2年、1547年)などがそれである。しかし、1565年に士林派がついに政権を掌握するに至り、士禍の恐れは一旦は遠のいた。退溪は1501年から70年に没するまでに、多くの士禍を経験しているが、45年の「乙巳士禍」の

(1) 李祐成『韓国の歴史像』創作と批評社、1982年、280頁。高橋進『李退溪と敬の哲学』(東洋書院、昭和60年)第3・4章で退溪の政治思想分析を試みているが制度史的、資料解説のレベルにとどまっている。ただ高橋氏は、朱子において主観的な方法(＝持敬静坐)と客観的な方法(＝格物致知)とが並存していたが、退溪に至ってそのバランスは持敬に大きく傾き退溪の哲学を「敬の哲学」と正当に特徴づけている。また、政治思想史研究として著名な朴忠錫『韓国政治思想史研究』(三英社、1982年、ソウル。本書は「李朝後期における政治思想の展開 (一)(二)(三)」『国家学会雑誌』88巻9・10号、同巻11・12号、89巻1・2号、1975年9月～76年2月をもとに纏められている)においても退溪学を非政治論とするのは同様である。同書31～39頁。朴氏は「退溪の思考方法が前者(一種の政治的、社会的「レッセ・フェール」)の強調に傾いていたことは明らかであり、それは彼の統治論において一層明らかになる」。「彼は朱子学におけるが如く、修身と治人の連続性を説きながらも、むしろ修身の方に

専ら重点を置き、治人に至っては具体的な政治的实践を示していない。むしろ彼においては治人とはすぐれて倫理的な性格を帯びるものに過ぎなかった」。退溪がなぜに政治的発言がほとんどしていないのかは本文において分析した如くである。なお、高橋氏、朴氏ともに指摘する退溪における、主観的方法＝持敬の拡大の意味については別稿においてその分析を果したい。

なお、本稿は今まで公刊してきた李退溪と李栗谷に関する以下の拙稿を前提としている。①「朝鮮封建ナショナリズムの構造と展開」(『近代とは何であったかー比較政治思想史的考察』岩間一雄編、大学教育出版、1997年)、②「李退溪の郷村・地域編成論ー李栗谷・朱子との比較を中心として」(『東アジア研究』第15号、大阪経済法科大学アジア研究所、1997年8月)、③「権力論における李栗谷と朱子ー朝鮮・中国官僚制の思想史的比較試論」(『史学年報』第6号、神戸大学、1991年5月)、④「李栗谷の郷村・地域編成論ー朱子との比較を中心に」(『朝鮮史研究会論文集』第29号、1991年10月)。

時には削職され、以後中央の官職は任命を受けでも固辞するようになる。退溪が大きな影響を受けたと推測される乙巳士禍を簡略に説明しておこう。第13代国王明宗（在位1545～67年）の母であり、第11代国王中宗（在位1506～44年）の妃であった文定王后尹氏（1501～65年）は、明宗即位後国王が未だ幼年であったため8年間に及ぶ垂簾聴政（摂政）を行い、その間親族である尹元衡たちや僧侶の普雨を登用し、明宗親政時にも強い権力を保持し続けた。この文定王后を中心とした勢力が明宗即位直後に「乙巳士禍」、「丁未の壁上の獄」などの士林派への弾圧を行ったのである。しかし彼らの権力の源泉であった国王の母である文定王后が65年4月に死去するや、士林派官僚が中央政界の要職に登用され、普雨は5月削職、6月済州島へ幽閉、杖殺され、尹元衡は8月に官職を剥奪され12月に死去した。こうして12月には乙巳士禍以後に罪人とされた者たちが釈放されたのである。これがいわゆる士林派政権の成立である。李退溪も69年には、大臣は清慎、六卿は邪慝の人無し、首相に至れば誠に柱石の臣なり、と士林派によって占められるようになった中央政界の状況を高く評価している。

「〔退溪は宣祖に〕対えて曰く『今日大臣の位に在る者は皆な清慎なり。六卿は邪慝の人無し。首相に至れば危疑の際に当たりて声色を動かさず、而して国勢を泰山の安きに措く、誠に柱石の臣なり。當に倚重すべき所の者は、意うに其れ此の人より出づること無きなり。』」<sup>(2)</sup>

1567年には第14代国王宣祖（在位1567～1608年）が16歳の若さで即位し、翌68年2月より親政を始めるが、退溪はこの若き国王に期待を掛けていたようで、最晩年にあたる1568年7月～69年3月に宣祖の召命に応じて京に上り、現実

政治に関わる重要な上疏や直言を集中的に残している。退溪は45歳以後には専ら郷里・地方にこもり哲学的思索や研究・講学に専念していたが、この間温めていた政治構想を、自らの人生の終末を予感しつつ、一気に吐露しているかのようである。

## 2. 李 退 溪

退溪の政治論として最もまとまった資料としては、68年8月に宣祖に上疏した「戊辰六條疏」<sup>(3)</sup>がある。今筆者なりの関心から、この戊辰六條疏を中心としつつ、必要に応じて他の資料にも言及して、退溪の目に映った当時の政治状況をみていく。

戊辰六條疏は、「序文」と「結び」以外は次ぎのような構成となっている。「1. 継続を重んじ、以て仁孝を全とうす。2. 讒間を杜さぎ、以て両宮を親しむ。3. 聖学を敦くし、以て治本を立つ。4. 道術を明らかにし、以て人心を正す。5. 腹心を推し、以て耳目を通じる。6. 修省を誠にし、以て天愛を承く」。この中で当時の政治、権力状況を捉えた「1. 継続を重んじ、以て仁孝を全とうす。2. 讒間を杜さぎ、以て両宮を親しむ。5. 腹心を推し、以て耳目を通じる」を中心として検討したい。

まず、「継続を重んじ、以て仁孝を全とうす」である。第13代国王明宗には後嗣がなく、徳興大院君（11代中宗と妃である昌嬪安氏との第二子）の第三子であった宣祖が、明宗の家に入養して王位についたのである。当然、宗法制に従い、養家の親への仁孝を隆んにし、逆に生みの親に対しての仁孝を殺する（減じる）べきであった。ところで退溪によれば「古より人君は至大・至重の君位の一統を承けてきたが、しかしその至大・至重の義を能く知る者は鮮く、孝は徳に慚ること有りて、仁は未だ道を尽さざる者多し」

(2) 『退溪全書』三（成均館大学校出版部、1985年）148頁。年譜下、52張。退溪69歳。

(3) 『退溪全書』一、181～193頁。巻6、36～59張。

という状態であった。通常の君位の継承であってもそうであるから、まして宣祖のごとく旁支より入養して王位を継承した者はますます養家の親に対して仁孝を尽くすことは困難である。「其れ或いは旁支より入継の君を以てすれば則ち能く仁孝の道を尽くす者は益々寡し。而して罪を彝倫の教に得る者は比々にこれ有り。豈に深く畏る可からざらんや」。宣祖が人間の自然な情である生みの親への愛情を、養家の親への愛情よりも優先させかねないと危惧したのであった。

「其の一に曰く、系統を重んじ、以て仁孝を全うす。臣聞く、『天下の事は君位の一統より大なるは莫し』と。夫れ、莫大の統を以て父は子に傳へ、子は父より承く。其の事の至重たるや、如何ならんや。古より人君、至大・至重の統を承けざる莫し。而れども至大・至重の義を能く知ることは鮮く、孝は徳に慚ること有りて、仁は未だ道を尽さざる者多し。常に処して猶然り。其れ或いは旁支より入継の君を以てすれば則ち能く仁孝の道を尽くす者は益々寡し。而して罪を彝倫の教に得る者は比々にこれ有り。豈に深く畏る可からざらんや。嗚呼。天に二日無く、民に二王無し。家に二尊無く、喪に二斬無し。古の聖人、本生の恩は重く、且つ大なるを知らざるに非ず。而るに禮法を制為り人後為る者をして之を子と為さしむ。既に曰く『之を子と為さば則ち仁孝の道は當に後ろとする所を専らにすべし。而して本生の恩は反りて之と並び立つを得ず』と。是こを以て聖人は義を乗りて以て本生の恩を殺し、恩を隆んにし以て後とする所の義を完うす。』<sup>(4)</sup>

「もし、或いは不幸にして聖慮淵衷、一たび彼に遷化すること有らば、則ち惟だに宗

廟より承け、長樂に奉ずる所以の者、動もすれば違慢有るのみならず。人或いは偏私の罅隙に乗じて詭経・破義の説を以て懲慚し、(殿下は)之に迎合し、その當に隆すべき所を殺し、其の當に殺すべき所を隆にするに馴致する者有らん。安んじ保たんとするも其れ必ず無からん。此れ古来、入継の君の罪を彝教に得る所以にして、今日の宜しく至戒と為すべき所の者なり。』<sup>(5)</sup>

現実の宣祖がそうであったとは限らないが、少なくとも退溪は内乱の芽を未然に防止しようと意図して、宣祖に「至戒と為すべき所」を諫言しているのである。退溪の危惧が不幸にして当たれば、朝鮮内は二分され内乱状態に陥りかねない。宣祖即位直後、明宗(在位1545～67)の妃の仁順王后沈氏による垂簾聽政が行われ、68年8月は宣祖親政が始まったばかりであったことを考えると、退溪は仁順王后と乙巳士禍を引き起こした文定王后とをだぶらせて見ていたのかもしれない。

次に「讒間を杜ぎて、以て両宮を親しむ」である<sup>(6)</sup>。慈殿(明宗の妃である仁順王后沈氏)と宣祖自身の大殿との間に亀裂が入らないように両宮を親しむように求め、先の養家への仁孝を尽くすように求めたことを更に詳しく展開している。「其の二に曰く、讒間を杜ぎて、以て両宮を親しむ。臣聞く、『父母の其の子を愛するを慈と為し、子の善く親に事ふるを孝と為す』と」。しかし、孝慈は天性よりでているはずであるが、常人(恒人)の家でも欠けることがあり、帝王の家にはこの患いが尤も多いのが実情である。「(或いは孝道に欠くこと有りて、慈天も亦虧くことあるに至る。其の甚しき者は、則ち至親にして化して豺狼と為るも之を恤れむこと莫きこと有り。恒人固より免がれざること有り。而して帝王の家、此の患い尤も多し。))。そ

(4) 同上182頁、巻6、37張。

(5) 同上182～3頁、巻6、38張左～39張右。

(6) 同上183～4頁、巻6、39張左～42張右。

の理由は「凡そ情勢は阻まれ易く、讒間は益々衆き」ためである。(「情勢は阻まれ易しと云ふ所以は、宮殿の御する所、遂日の進見の地、蔽に近くして勢或は阻まれ、事は多端にして情或いは鬱するを以て也。讒間、益々衆しと云ふ所以は、両宮の間、左右に昵侍し、便嬖給事する者、宦寺・婦人に非ざる無きを以て也。この輩の性、例するに多くは陰邪狡獪にして姦を挟みて私を懷き、乱を喜びて禍を楽しむ。孝慈の何物為るか、禮義の何事為るかを知らず」)。

これらは朝鮮王朝の不安定な権力状況の根本原因であった。「又今日殿下の親に事えるは、所謂義を以て恩を隆んにし、変を以て常に処す。斯の二者の際は、実に小人・女子の隙を伺いて讒を造る所の者なり。臣伏して前代の事を観るに、上に慈親有りて、下に賢嗣有り。而れども賊宦・讒妾の為に両間に交々闘い、厥の孝を終えざる者は何ぞ勝て道うべけんや」。

こうして退溪は宣祖に「自らを治むるに蔽にして、家を正すに謹み、親に事えるに篤くし、子の職を尽くされ」るように求める。(「伏して願わくは殿下、『大易』『家人』の義に監み、『小学』『明倫』の訓に法とり、自らを治むるに蔽にして、家を正すに謹み、親に事えるに篤くし、子の職を尽くされよ。左右近習の人をして洞然として、皆に両宮の至情は孝慈より重きは莫く、而して吾輩の讒間は以て其の間に行ふを得ること無きを知らしめ、亦其の孝慈を成す者は安きを獲り、而隙を生ぜしむる者は罪を得るを見せしめば、則ち自然に陰邪・間乱の患い無く、孝道は闕くこと無からん」)。これが果たされれば、両宮のみならず、さらには恭懿殿(12代国王仁宗の妃である仁聖王后朴氏)も含めた三宮が「驩洽し、万福畢く臻らん」状態に至り得ると期待するのである。(「又此の心を推し、此の誠を用るて以て孝敬を恭懿殿に致し、情を

尽くし力を竭くさざる罔ければ則ち道隆に継々し、仁至り義尽きて、三宮驩洽し、万福畢く臻らん」)。

退溪は「結び」において、「必ず先に首の二条を以て本と為す」<sup>(7)</sup>と明言しているように、「1. 継統を重んじ、以て仁孝を全とうす」、「2. 讒間を杜さぎ、以て両宮を親しむ」を最重視しているのであるが、ここには君位を継承した宣祖以外の王族に権力の実権が握られかねず、それら権力者たちの間に小人・宦寺(宦官)・婦人などが介在することにより権力闘争が一層激化するという朝鮮王朝の不安定な権力状況が描き出されている。退溪が中宗に啓して述べた、外戚によって亡んだ東漢の故事、歴史学習の意義は、遠い昔の中国のことでなく、朝鮮王朝の国王にこそふさわしいものであったのであろう。

「啓して曰く『一代の興るに、必ず一代の規模有り。東漢の光武(帝)は外戚を尚ばず。而してその亡ぶに及ぶや、専ら外戚の手に由る。創業の君、親しく規模を立つ。而るに子孫は之を守る能わず、以て国事を誤らす。章帝も亦た賢君なり。而してその時始めて外戚專擅の漸有り。凡そ史を読むは、須く治乱の由る所を見るべし、然る後に益有り。』」<sup>(8)</sup>

さて国王権力を制約するものは、国王の親族ばかりではない。大臣(議政)、台諫(司憲府・司諫院)をはじめとした有力官僚である。退溪は、国家を人体になぞらえた有機体国家論のとき議論を展開し、君主=人主は元首、大臣は腹心、台諫は耳目に該当し、政治の実効はこの「三者が相待ちて相成る」と指摘し、君主の独断ではなく、三者による協力の必要を力説している。

「其の五に曰く、腹心を推して以て耳目を

(7) 同上192頁、巻6、58張左。

(8) 『退溪全書』三、117頁、年譜上、十張右。退溪42歳。



通ず。臣聞く、『一国の体は猶一人の身のごときなり』と。人の一身は元首上に居りて統臨し、腹心中を承りて幹任す。耳目旁達し、衛り<sup>やわ</sup>諭らぐ。然る後に身の安きを得る。人主は一国の元首也。而して大臣は腹心也。台諫は其の耳目也。三者相待ちて相成る。実に国を有するは不易の常勢にして天下古今の共に知る所なり。古の人君は大臣を信任せず、台諫を聴用せざる者有り。譬えば人の自らその腹心を決し、自らその耳目を塗るが如きなり」。<sup>(9)</sup>

そしてこの協力は当然のごとく君主は臣下を信任し、協力関係を築くとはいっても、それは私欲を満たすためではなく、臣下は君主が私欲に流れようとする場合には危険を犯してでも君主を諫めなければならない。しかし恐らくは土禍の時代を想起しつつ、君臣共に私欲によって結合し、「締結すること盤固たり、人は能く間すること莫し」という状態が前代までの実情であった。

「其れ、或いは大臣を信任するもその道に由らざること有り。其の之を求むるや、その能く匡濟・輔弼するの賢を求めず。惟だ其の阿諛・順旨する者を求め、以て其の私を遂ぐことを謀る。是れ其の得る所の者は、姦邪・乱政の人に非ざれば、則ち必ず兇賊・擅権の夫なり。君は此の人を以て欲を済すの腹心と為す。臣は此の君を以て欲を済すの元首と為す。上下相い<sup>おご</sup>豪り、締結すること盤固たり、人は能く間すること莫し。而して一たび鯁直の士が其の鋒に触犯すれば則ち必ず之に竄謫・誅戮を加え、<sup>せい</sup>蠶と為り粉と為りて後已む。是に由りて忠賢は尽く逐われ、国内は空虚なり。而して耳目の司は皆当路の私人なり」。<sup>(10)</sup>

だが士林派政権成立後状況は変化し、臣下は

善類が占め、君主の宣祖にも期待が持てたようである。「今日朝廷の事は是に異なれり。聖智の徳、首として庶物に出でて位を正し体に居りて一国の元と為る。而して其の腹心の地、耳目の官に於いて亦皆衆より選びて其の責を重くす。」<sup>(11)</sup>

この君臣間の協力の要請は、退溪が宣祖に対して様々な角度からしばしば力説したものであり、退溪の宣祖への最後の諫言でも特に強調している。退溪が宣祖への諫言を尽くし、国家を君主と共に担う臣下としての義務を全て果たし終えたかのように、69年3月に断固譲らぬ態度で老病を理由に辞職と帰郷を求めたが、宣祖はその意志の堅さを見て引き留めることを諦め、「今帰らんとするに、乃ち言わんと欲する所の者有ること無からんや」と、退溪に最後の忠言を求めた。退溪はそれに対して、宣祖には「絶人の資が有り」、そのため「自分一人の智を以て世を馭し、群下の心を軽忽することが有り」と戒め、『易』の「亢龍悔有り」を解釈し、臣下の協力を得なければならないことを強調した。

「(退溪) 対えて曰く『古人云う「治世を憂い、明主を危ぶむ」と。蓋し明主は絶人の資有り。……絶人の資有れば、則ち独智を以て世を馭し、群下の心を軽忽すること有り。……聖質は高明なり。経席の上、文義に通貫し、群臣の才智は以て聖意を満たすに足らず。故に論議処事の間、独智（を以て）世を馭すの漸<sup>まさ</sup>無くんばあらず。識者は預め以為へらく慮んばかれり。臣が前日上げる所の「乾卦、飛龍在天之上、又亢龍悔有り」の言有り。夫れ「飛龍在天」とは、乃ち人主の極尊の位なり。その上に又一位有れば則ち高きに過ぎる。故に自らを高くするに過ぎる、「亢」なり。臣下と同心・同徳を肯んぜれば則ち賢人下位に在るも輔

(9)『退溪全書』一、188～9頁。巻6、50張左～51張右。

(10)同上189頁、巻6、51張。

(11)同上189頁、巻6、52張。

け無し。所謂、「亢龍、悔有り」なり。夫れ、龍の物為るや、雲を以てその変化を神にし、沢は万物に被らず。人君が下人と同心・同徳<sup>がえ</sup>を肯んぜれば則ち龍の雲無きが如し。その変化を神にし、沢は万物に被らそうと欲すと雖も、それ得べきか。此れ君徳の大病なり。」<sup>(12)</sup>

退溪が君臣間の相互協力、善き臣下による輔弼を政治の理想としている様が描き出されていた。小括しよう。朝鮮王朝は統一権力として成立し、国王はその頂点に立つ存在であった。しかし退溪の捉える統一権力の内実は、国王のみならず、国王の親族や有力な士族・官僚へ実権が相当程度分散し、常に権力闘争の芽が萌しており、さらに彼ら権力者たちの間に小人・宦寺（宦官）・婦人などが介在することにより権力闘争が一層激化しかねないというものであった。このような権力状況が頻繁なる士禍発生<sup>（13）</sup>の背後にあった。しかしながら、このようなことは、別に李退溪に特別なことではなく、極めて当然のことのようにも思える。国王が権力の頂点に立つとはいえ、仁孝は儒教の基本徳目であることからすれば国王の父母をはじめとした親族が、事実上大きな権力を持つであろうし、また君主一人では全人民を統治しえず、そのために君主と人民との間に介在する行政スタッフ＝官僚たちが存在するのであるから君臣間の協力を説くのは当然のことのようにも思える。しかし、退溪が師と慕う中国・南宋の朱子（名は熹、字は元晦・仲晦、号は晦庵 1130～1201年）の上奏文からは相当異質な印象を受ける。以下、朱子の議論を見ていこう。

### 3. 朱 子

朱子は19歳で科挙に合格したが、「初めて官途についてから、死に至るまでの五十年間、高宗、孝宗、光宗、寧宗の四代にお仕えしながら、地方行政の任務に携わったのが、たったの9年間、朝廷には40日間しか身を置かなかった」<sup>(14)</sup>。朱子もまた李退溪同様に地方での学問研究と講学<sup>（15）</sup>に熱心に従事し、中央の官職には就こうとしなかったのである。しかし朱子は、退溪とは対照的に、多くの政治的発言、封事、奏劄を残している。その中で朱子は当然、君主は賢臣に親しみ、臣下の主体的な支えを受けるよう要請している。

「君の心は、以て自ら正すこと能わず。必ず賢臣に親しみ小人を遠ざけ、義理の帰を講明し、私邪の路を閉塞して、然る後に乃ち得て正すべし。」<sup>(14)</sup>

「陛下の独断に出でてその事悉く理に当るも、亦治を為すの体に非ず。以て将来の弊を啓く。……臣恐らくは独断たるを名として、主威下移するを免れず」<sup>(15)</sup>

また君主の父や母（太皇太后）が君主権力の制約になっていることも指摘している。

「太皇太后が御自ら計画を立てられ、陛下が帝位を継承されたのでありますが、これは臨機応変の処置をとることによって、ほぼ正しさを失わなかったものであるといえましょう。しかしそれから今日まで3カ月にもなりますが、もしかしたら御父君の位を、陛下が奪い取ったのではないかという疑いがもたれているようであります。これでは禍の種が、人知れぬところに既に潜んでいるといわねばなりません。……帝位を我がものにしようなどと考えたことはない、

(12)『退溪全書』三、147頁、年譜下、49～50張。退溪69歳。

(13)『朱子行状』佐藤仁翻訳、明德出版社、昭和44年、181頁。

(14)同上64頁。『朱子文集』巻1、「庚子応詔封事」16張。『晦庵先生朱文公文集』（中文出版社）669頁

(15)『朱子文集』巻14、経筵留身面陳四事劄子、32張左。『晦庵先生朱文公文集』834頁。

といわれた陛下のそのみ心を拡充なされば、全ての罪咎を陛下御自身が負われるという親へのまごころを尽くすことがおできになるはずです。また親を忘れたことはない、といわれたそのみ心を拡充なされば、親に対する温清定省の礼を、十分に行き届かせることがおできになるはずです。常にこれを踏み外さないようになされるならば、父子の間柄が正しい状態におかれ、大御心も確立されましょう。」<sup>(16)</sup>

しかし、有力な臣下や王族などの君主権力の攪乱・制約要因にもかかわらず、朱子の君主権力は「全ては君主が一心を正すことにかかっている」という専制的なものである。例えば、『戊申封事』（1188年、朱子59歳）の中からそれを見てみよう。『戊申封事』では「天下の大本」、次いで「今日の急務」とが論じられている。天下の大本とは「陛下の心」であるが、それは「天下の事千變万化、その端窮り無くして、而して一として人主の心に本づかざる者無し。此れ自然の理也。故に人主の心正しければ、則ち天下の事一として正しきに出でざる無し。人主の心正しからざれば、則ち天下の事一として正しきに由るを得る無し」<sup>(17)</sup>といわれるごとく、極めて絶対的なものとあらわれている。具体的には人主の心は、家（后妃・後宮）・左右（貴戚・近臣・宦官）のみならず朝廷・百官・六軍・万民の正しきに由るべき根源である。「此れ朝廷・百官・六軍・万民の敢えて正しきに出でざる無く、而して治道畢る所以也。心一つ正しからざれば、則ち是の数者固より従いて、その正しきを得る無し。是の数者一つ正しからざること有りて、而して心正しというは、則ち亦安

くんぞ是の理有らんや」<sup>(18)</sup>。それ故、人主の心は今日の急務の六事（①太子の輔翼②大臣の選任③綱維の振挙④風俗の変化⑤民力の愛養⑥軍政の脩明）の根本でもあった。「凡そ此の六事、皆緩めるべからず、而してその本は陛下の一心に在り。一心正しければ、則ち六事正しからざる無し。……所謂天下の大本なる者は、又急務の最急にして、而して尤も以て少緩すべからざる者なり」<sup>(19)</sup>。朱子の君臣関係の描き方は、全ては君主の一心にかかっているという極めて専制的で、退溪の相互協力的君臣像とは径庭を有したものである。「大臣を選任するの說に至りては、則ち臣前に所謂賢を求るに勞し而して賢人用いるを得ざる者、蓋し已にその端を發す。夫れ陛下の聰明を以て、豈に天下の事必ず剛明公正の人を得て、而る後任すべきを知らざらん哉。その常に此の如き人を得ず、而して反りて鄙夫の位を竊むを容る所以の者は、他有るに非ざる也。直に一念の間、未だその私邪の蔽を撤す能わざるを以てなり。」<sup>(20)</sup>

朱子も退溪も弛緩した官僚制度の紀綱の回復・強化、すなわち集権化を志向しているのであるが、朱子は君主の一心を正すことに全てはかかっているとするのに対し、他方退溪においては、「聖学を敦くし、以て治本を立つ」、「道術を明らかにし、以て人心を正す」（戊辰六條疏、3・4条）と君主が心を正すのはもちろんであるが、臣下との協力を重視し、全ては君主が一心を正すことにかかっているというような専制的な君主像を描き出すことは決してなかった。朱子の封事類を熟読し、至る所で引用もする退溪が、自覺的に朱子のように語り得ないと判断していたのである。何ゆえにかくのごとき相違が生

(16) 前掲『朱子行状』148～9頁。書き下し文では文脈を理解しにくいため、ここは佐藤氏の意識による。

『朱子文集』巻14、甲寅行宮使殿奏割一、9～10張。『晦庵先生朱文公文集』808～10頁。

(17) 『朱子文集』巻11、20張。『晦庵先生朱文公文集』677頁。

(18) 『朱子文集』巻11、21張。『晦庵先生朱文公文集』680頁。

(19) 『朱子文集』巻11、35～6張。『晦庵先生朱文公文集』708～9頁。

(20) 『朱子文集』巻11、27張。『晦庵先生朱文公文集』692頁。



れたのであろうか。

中国史において宋代は清末まで続く「皇帝独裁政治」が確立した時代として有名である。もちろん唐代以前でも、秦の始皇帝、漢の武帝などはずいぶん強度の独裁権を発揮しているが、それは彼らの個人的能力によるものであり、彼らが没すると独裁政治はたちまち崩壊した。ところが宋代では一つの政治制度として皇帝独裁体制が確立したのである。中央と地方のあらゆる官制の権限をできる限り細分化し、できるだけ多くの機関を皇帝の直接の指揮下におき、最後の決裁を皇帝自身が行なうというもので、こうして皇帝の命令一つで地方官までが思いどおりに動く体制が確立したのである。その結果、有力貴族、皇族、宦官などの皇帝権力を制約するファクターが、制度的には除去された。

朱子はこのような強力な権力、官僚装置を握る皇帝に対して封事を奉っているのである。朱子が全ては陛下が一心を正すことにかかっていると力説する時、それは世事に疎い道学者の空理空論などではありえず、まことに政治課題の達成いかんは皇帝の一心にかかっていたといえよう。

朝鮮王朝の場合は、退溪の封事から窺い知り得るように、中央集権的官僚制国家としての完成度では、宋代以降の中国と比較すれば相当落差があった。国家＝君主＝全体に対して、官僚、王族、地方などの個別的な力が強いのである。先に見た士禍の多発はこのような権力状況の反映であった。

#### 4. 李 栗 谷

さて退溪とほぼ同時代の李栗谷のそれを退溪の特質を浮かび上がらせるために見ていこう。栗谷は同時代の人であるため、同じ現実を見ていたが、朱子のごとく「全ては陛下が一心を正

すことにかかっている」とは決して語り得ず、臣下の支えを重視する点は退溪と共通している。しかし、類似の現実把握をしながらも、どのような方向を志向するのかとなると相当異なっていた。栗谷は退溪とは対照的に経世家として多くの上奏文を残し、積極的に政治的発言をしており、この点では朱子と類似している。今必要な限りで簡略に栗谷の代表的な上奏文である『万言封事』（1574年、栗谷39歳）からこの点をみてみよう。

権力主体に関しては、君臣間の情緒的、家族主義的一体感が不足していることを指摘し、君臣関係を親子関係を初めとした近しい関係に擬え、専ら君臣関係の強い情緒的一体感の作興が強調されている。

「君臣の交際は猶天地の相い遇うがごときなり。……是れ故明良相い遇うは、肝膽相い通じ密なること父子の如し、合すること符契の如し。骨肉の親も間する能わず、鑠金の口も容れる所無し。然る後言行なはれ、策用いられ、庶績以て成る。三代の聖主皆是の道に因る。未だ君臣相い深く信ぜずして能く治効を成す者は有らざるなり。」<sup>(21)</sup>

「聖帝明王人を待ち事を処するに一に至誠を以てす。……臣為る者は亦之を仰ぐこと父母の如し、之を信ずること四時の如し。之を進れば則ち任を克くせざるを懼れ、いよいよその忠を尽くす。之を斥ければ則ち自ら罪戾を知りて只その身を責むるのみ。故にその人心を得るや以て湯火に赴くべし、以て白刃を踏むべし、以て遺腹を朝に植うべし。委裘して乱れず。只君上有るを知るのみにしてその身有るを知らざるは、他なし、至誠の感ずる所なり。」<sup>(22)</sup>

「賢士に親しみ以て啓沃の益に資す」の項目においても、「正士に親しみ近づく」ために次

(21) 『栗谷全書一』（驪江出版社）98頁。『栗谷全書』巻5、16～17張。

(22) 「実功に務めず」の項目中の「上下交ごも乎くむの実無し。『栗谷全書一』105頁。『栗谷全書』巻5、30張。

のように提言をしている。「人君の学、正士に親しみ近づくより善きこと莫し、見る所皆正事、聞く所皆正言、君不正を欲すと雖も、得んや。若し正人親しまず、而して惟だ宦官・宮妾はれ近ければ、則ち見る所正事に非ず、聞く所正言に非ず、君正を欲すと雖も、得んや」<sup>(23)</sup>。そしてこの項目の最後も「夫れ是の如くなれば、則ち上下の契日に密たり、而して情意無間、性理の説日に進む、而して聖学将に就らんとす。交歓すること魚水に同じきこと有り。邪穢天日を干す罔し」<sup>(24)</sup>と、君臣間の情緒的一体感作興の強調で締めくくる。

要するに栗谷は、国王が経筵に集合した賢士、大臣、臺諫、承旨などと親しく接触する機会を増やし、王族や不正な臣下、及び宦官・宮妾を抑えるために臣下＝正士・賢臣の積極的な参与と国王との協力を力説し、そのために君主と臣下との間の家族主義的な情に基づき一体感を強く作興しようとしているのである。退溪以上に、国王に求心力を持たせようとしており、集権化を強く志向しているのである。それでは何ゆえに三者の権力状況把握と志向性にこのような相違が生れたのであろうか。三者が統一権力に要請する行政目標、政策課題の中にその原因を探らねばならない。

### Ⅲ. 集権化の契機＝行政課題

#### 1. 朱 子

宋代以降の中国も朝鮮王朝も共に郷村の最下層の直接生産者である小作農までが経営主体にまで成長してきていた<sup>(25)</sup>。このような社会では基本的には、一地域内のみで完結的な再生産圏が形成されるために、ヨーロッパにおいて典型

的に見られるように分権的な領主制的封建社会が形成されるのが通常である。しかし南宋、朝鮮王朝は共に集権国家としてあった。これは一地域内のみでは処理しえない行政課題があったからであろうが、その点を見て行こう。

中国の封建社会成立期である宋代は朔北の騎馬軍団の絶えざる南侵の脅威に晒され、宋は満州族の金によって中原を占領され、以後も絶えず圧力を受け続けた。この民族の危機の時代に思想形成を遂げた朱子は、「天下国家を為める者は、必ず一定不易の計有り。而して今日の計は政事を修め、夷狄を攘うに過ぎざるのみ。……夫れ、金虜の我において共に天を戴かざるの譬有れば、その和すべからざるや義理明らかなり」<sup>(26)</sup>というように、講和論に強く反対する激烈な民族主義者であった。この恐るべき外敵に対するには、中国全土の力をより有効に結集させねばならない。そのことを朱子は上奏文の至る所で繰り返し力説している。また中国の歴代王朝は大陸を貫流する巨大河川の氾濫を防ぐための治水事業という行政課題をも背負わねばならなかったが、この集権化の契機も朱子の中で「一旦、不幸にして方数千里の水旱有らば、則ちそれ横潰四出して将に如何ともすべからざる者有らんとす。未だ知らず、陛下、何を以て此に処せんとするや」<sup>(27)</sup>と時々顔を覗かせている。

#### 2. 李退溪と李栗谷

##### (1) 南北の外敵

朝鮮王朝の場合は、中国のような大河川はなく、栗谷・退溪共に南＝日本と北＝満州の侵入の脅威を強調している。栗谷は上奏文の至る所で枚挙にいとまがないほどそのような趣旨の発言を繰り返している。一例を挙げれば以下のこ

(23) 『栗谷全書一』104頁。『栗谷全書』巻5、29張。

(24) 『栗谷全書一』105頁。『栗谷全書』巻5、30張。

(25) 前掲拙稿「李栗谷の郷村・地域編成論」。

(26) 『朱子文集』巻11、27張、壬午応詔封事。『晦庵先

生朱文公文集』646頁。

(27) 『朱子文集』巻11、12張、庚子応詔封事。『晦庵先生朱文公文集』662頁。

とくである。

「今世の弊、若し盡く言わんと欲すれば、吾日に力の足らざるを恐れるなり。……数年を過ぎずして民必ず魚爛し、而して土崩す。抑々大いに憂うべき者有り。今の民力を度れば、垂死の人の如し。氣息奄奄とし、平日支持せんとするも、亦保つべからず。もし、外警南北に起ること有れば、則ち將に必ず疾風の落葉を掃うが若くならんとす。」<sup>(28)</sup>

退溪は発言の数は少ないが、同様に満州（北虜）と日本（島夷・南倭）への強い危機感を表明している。次の45歳と69歳の時の資料がその証左である。

「当今天変上に現われ、人事は下に闕く。大禍重疊し国運は艱否なり。根本<sup>きこう</sup>脆隳にして、辺圉は虚疎なり。兵耗し糧竭き、民怨み神怒る。此れ吾が東方、何等の時なるや。夫れ太白昼に見わる、乃わち兵興の象なり。……今人事を修め以て天変に応ぜんと欲す。而るに島夷の来朝の望みを絶つ。是れ我自ら之を致すこと無し<sup>きこう</sup>の道と謂ふ可けんや。……且つ国家は已に北虜と鬻を構ふ。安んぞ彼の中に諸酋の桀驁<sup>けつごう</sup>の切齒報復し、辺守を謀犯する者有らざるを知らんや。もし、南北の二虜時を一にして俱に発すれば、則ち東を擗して西は掀なり、腹を衛りて背潰す。未だ識らず。国家何の悖む所を將って能く此れを辨ずるかを。」<sup>(29)</sup>

「（退溪は宣祖の問いに）対えて曰く『古人云う「治世を憂い、明主を危ぶむ」と。……治世は憂うべきの防ぎ無し。……憂うべきの防ぎ無ければ、則ち驕侈の心必ず生ず。此れその懼れるべき者なり。今の世治平に似ると雖も、然れども南北に鬻有り。生民は困悴し、府庫は空虚なり。將に国はそれ

国に非ざるに至らんとす。猝に事変あれば、則ち土崩瓦解の勢い無くんばあらず。憂うべきの防ぎ無しと謂うべからざるなり。……夫れ、太平極まれば則ち必ず乱を生ずるの漸<sup>きざし</sup>有り。今時は則ち然り。事或いは誤つ所有れば則ち船を挽きて水に逆らい上るが如し。一たび手を放す頃、流れに従いて下り、風波に遇いて覆るなり。』」<sup>(30)</sup>

この南北の外敵の存在と警戒心が朝鮮王朝が中央集権的な官僚制国家として成立した根拠であった。しかし外圧は朱子の場合より明らかに弱い。そのため朝鮮王朝は集権化の度合いにおいて宋代以降の中国と径庭があったのであろう。

しかし退溪と栗谷とでは、単に発言の数が大きく異なるのみならず、その論じ方にも質的な相違があるようである。栗谷の場合は、最大の行政課題が南北の外敵への警戒とそのための対応策、すなわち軍制改革をはじめとした諸改革が詳細に論じられるのである。そしてこの行政課題を果たすために相応しい権力主体を構築するために君主の心術、紀綱の回復が要求されると共に、君臣間の家族主義的な情に基づく一体感が強く作興され、集権化を希求していた。いわば栗谷の場合は外敵の脅威の意識化に対応して、行政課題と権力主体の問題が言及されるのである。しかし退溪の場合は、外敵への脅威の意識化・強調が行政課題・権力主体とに対応していないのである。退溪が南北の外敵の脅威を強調した上奏文は上の45歳時の「甲辰乞勿絶倭使疏」が唯一のものであり、（69歳の時のものは朝廷を去るに当たり、宣祖より最後の忠言を求められたのに対して口頭で答えた）、戊辰六條疏でも「六に曰く『修省を誠にし、以て天愛を承く』」において行政課題を極く簡単に列挙している中で、「辺圉は率むね虚しく、而して

(28)『栗谷全書一』326頁。『栗谷全書』、巻15、東湖問答、26張。

(29)『退溪全書』一、168～9頁。巻6、10張左～11張

右「甲辰乞勿絶倭使疏」退溪45歳。

(30)『退溪全書』三、147頁。年譜下、49～50張。退溪69歳。

南北には憂有り。小醜の猝かに入るを慮んばかり」とさりと触れるだけである。戊辰六條疏で典型的に見られるように、退溪の第一義的関心は内乱の芽を摘み取るための不安定な権力状況への対応であり、行政課題は第二義的なものでしかない。なぜにこのようなことが起きているのであろうか。今少し行政課題の中身を検討したい。

## (2) 軍制改革

南北の外敵に対応するには何よりも軍制改革が必要であったが、栗谷は「国」防への強い関心を示し、大胆な改革実施の主張を一貫して主張し続けた。その代表が、83年（48歳）に国王に対して行なった「十万養兵」の主張である。しかしこの十万養兵説に対して退溪の門人である柳成龍は「事件が無いのに兵を養成するのは禍を養成することである」として反対し、その他の者たちも「栗谷の主張は行過ぎた心配事」と考え、実現されなかった。士林派政権成立後の朝廷においてさえ栗谷の主張は過激な行き過ぎとされていた。

「国勢之不振極まれり。十年を出でずして當に土崩之禍有るべし。願わくは預め十万兵を養わんことを。都城二萬、各道一萬、復戸練才し、之をして六朔に分ちて都城を遞守せしむ。而して變を聞かば則ち十萬を合して把守し、以て緩急之備と為す。否なれば則ち一朝變起くれば、市民を駆りて大事を戦ひ去くを免がれず。柳公成龍以て不可と為して曰わく『無事にして兵を養ふは、是れ禍を養ふなり』と。筵臣皆先生の言を以て過慮と為す。遂に行わず。先生退ぞきて柳公に謂ひて曰わく、『俗儒固より時宜に達せず、而して公も亦た是言有るや』。仍ち愀然と久しうす。壬辰亂作りて、

柳公朝堂にて歎じて曰わく『李文成は真の聖人なり』と。』<sup>(31)</sup>

退溪は栗谷と全く対照的である。南北の敵の脅威に警笛を鳴らしながら、軍制改革の実施は全く言及しないのである。そのみならず、68年9月には当時軍人の欠員が甚だしく、その補充が朝廷において議論・決定され、補充作業が始められていたのであるが、退溪は宣祖に筭子（算子）を上げ、明宗の葬儀（山陵）や中国からの使者（天使）の受け入れ、或いは凶作を理由として、民の負担が重い今は補充作業（籍軍）は中止すべきであると上奏し、そして宣祖が退溪の言を容れて停止を命じた。

「夕講、事を啓す。時に籍軍の挙有り。先生啓して曰く『山陵を経ること纔ずかなり。又天使を経る。歳は且つ未だ稔らず。籍軍は時に非ざるなり』。仍わち榻前において筭子を出して展読す。大意、『以為へらく兵を搜し闕を補うは當に急ぐべき所に在り。但し去年以来国恤山陵の鉅役連なり仍なる。入天使は踵ねて至る。民生困弊す。今年又風旱の災有り。飛蝗天を蔽う。四方より災を憂い荒を恤える報は相繼いで絶えず。国家は未だ嘗て一号を発し一政を出し、以て民を救う計を為さず。方且家<sup>そのうえ</sup>を採し戸を括る。脅驅侵督は星火より急なり。邦本は寧しろ動揺せざらんや。臣愚以為へらく姑らく停め以て年登り民息み、而る後に之を為すに如かず。義において得為り』。上皆之を納む。軍籍のことを停めるよう命ず。』<sup>(32)</sup>

しかし退溪の上奏に対して、当時穩健な士林派と目されていた李浚慶・権轍らの大臣たちでさえ大いに不満であった。

「時の大臣李浚慶・権轍等は力めてその議に主たり。一朝、（退溪先生）啓して（宣祖が）之を罷む。皆心は平らかなる能わず。

(31) 『栗谷全書』二、322頁上段。巻34、32張右、年譜。

(32) 『退溪全書』三、141～2頁。年譜下、38～9張。

退溪68歳。筭子の原文は『退溪全書』一、182頁、巻7、1～3張「戊辰 経筵啓筭一」。

関起文其の意を經席に承けて啓して曰く『国事既に大臣と議して定める。而るに旋<sup>たちまち</sup>一人の言を以て之を改む。道の傍らに舍を作るに幾からざらんや』と。後に轍また啓して曰く『其れ時は一月罷めざるがごとくなれば、則ち事は已に緒に就く。而して人の言の撓める所と為る。追って悔いるも及び及ぶこと莫し。』<sup>(33)</sup>

民は当時偶然疲弊していたとはいうものの、李浚慶らの穩健的な士林派大臣でさえ実行を主張しているほどであるから、当時の民の状況が平年に比して特別に酷いものとは、思いにくい。仮に68年当時の民の疲弊が特に酷かったとしても、退溪が軍制改革の必要を感じていたならば他の機会にそのような主張をするはずである。しかし、確認しうるだけでも45歳、69歳の時に南北の敵の脅威に警笛を鳴らしながら、それに対応した軍制改革には言及しないのである。退溪は軍制改革はすぐには不要と見なしていたのであろう。それは当時の士禍への態度からも窺い知り得る。

### (3) 士禍への態度

士林派官僚たちは政權掌握後、当然のように士禍への評価を覆し、罪に陥れられた士林派人士の名誉回復と勲旧派の偽勲削除を主張するようになる。4大士禍で未だ未整理の「己卯士禍」(中宗14年、1520年)と「乙巳士禍」(明宗元年、1545年)は特にそうであった。68年に退溪は、己卯士禍に対して、宣祖より「この頃朝議は趙光祖に追贈せんと欲す。その人の学問・行事は如何」と尋ねられたのに対して、当時改革の旗手であった趙光祖たち年少の士林派官僚を賞賛しつつ、士林派を罪に陥れた南袞らの勲旧派から官職を追削することを要請し、宣祖もそれを受け入れた。

「(退溪)啓して曰く『光祖、天稟は秀出なり。早くに志を性理の学に有する。家に居りては孝友。中廟、治を求めること渴くが如し。将に三代の治を興さんとす。光祖も亦た以て不世の遇と為す。金淨・金湜・奇遵・韓忠等と相い與に協力同心し、大いに更張有り。條法を設立し、小学を以て教人の方と為す。且つ呂氏郷約を举行せんと欲す。四方の風動く。もし久しく廢せざれば、治道は行うこと難からざるなり。但し当時の年少の輩、治を致すを急ぎ、速やかにせんと欲するの弊無くんばあらず。旧臣の擯<sup>しりぞ</sup>けられし者、職を失い快快とす。百計し隙を伺い、罔極の讒を構成す。一時の士類或いは竄<sup>のが</sup>れ、或いは死す。余禍蔓延す。今の士林の間の志を学行に有する者に至りては、之を惡む者は輒わち己卯の類と指し為す。人心孰<sup>た</sup>れか禍を畏れざらんや。士風大いに汚れ、名儒出でざるは、職<sup>もと</sup>より此の故なり』。上曰く『この頃弘文館は南袞の官職を追削することを議す。此れ亦た如何ぞ』。(退溪)啓して曰く『己卯の禍は正に南袞・沈貞之の奸に由る。而して終に中廟の累と為る。罪は天に通ずと謂うべし。上の意は先朝の大臣の追削なるを以て未だ安んぜずと為せり。意は甚だ忠厚たり。然れども衆論の啓する所は、乃ち彰善・瘴惡の事なり。光祖に褒め贈り、南袞を追って罪するは則ち是非分明なり』。上、大臣に収議を命じ、弘文館・両司・政院をして各々南袞の罪状を陳べしむ。遂に南袞の官職を奪う。』<sup>(34)</sup>

しかし退溪は最も近い過去の「乙巳士禍」に対しては全く異なる態度を取っている。実は退溪の年譜はこの件に関して黙して語ることがない。乙巳士禍に関して名分を正すことを最も強

(33)『退溪全書』四、205頁。言行録卷三、14張。

(34)『退溪全書』三、143頁、年譜下、42張。退溪68歳。



く主張したのは、当時35歳の少壮官僚であった栗谷であったが、その「行状」には、1570年5月に栗谷が、朝廷での議論が「多くは（栗谷）先生の議を以て過と為せり」という中で、「先生独り衆議を排し終始撓まず。玉堂の四十一箇は、皆先生の手筆なり。丁丑（1577年）に至りて先生の議によりて又之を論ず。竟に回天を得る。物論之を快とす」と栗谷の業績を賞賛する一方、退溪が奇高峯に送った書簡で「先朝已に定めし事は革罷すべからず」と乙巳士禍をはじめとした先朝＝明宗代の士禍の現段階での見直しについて反対していたことを記している。

「五月、白仁傑上疏し乙巳・己酉の冤枉を昭雪せんことを請う。是において政府・三司同じく発し論じ啓す。而れども猶お未だ偽勲のことを挙げず。先生以為へらく『正名は為政の本なり。而して名之不正は偽勲より甚だしきこと莫し。乃ち同僚に言いて力めて削勲の議に主たり。時に退溪先生、奇高峯・大升に（書を）与えて、亦以為へらく『先朝已に定めし事は革罷すべからず』と。朝議、多くは先生の議を以て過と為せり。而れども先生独り衆議を排し終始撓まず。玉堂の四十一箇は、皆先生の手筆なり。丁丑（1577年）に至りて先生の議によりて又之を論ず。竟に回天を得る。物論之を快とす。』<sup>(35)</sup>

退溪の思想からすれば、乙巳士禍の評価見直しには賛成して当然であるが、この時何ゆえに反対したのであろうか。先に己卯士禍で倒れた趙光祖たちについて退溪は次のように（趙光祖たちの行った改革は）「久しく廃せざれば、治道は行うこと難からざるなり」と高く評価しつつも、「但し当時の年少の輩、治を致すを急ぎ、速やかにせんと欲するの弊無くんばあらず。旧臣の擯ぞけられし者、職を失い快快とす。百計

し隙を伺い、罔極の讒を構成す」とその失敗の原因についても言及していた。<sup>(36)</sup>

今朝廷において士林派が優位を占めるようになったとはいえ、それが絶対的なものである保障はない。退溪には、栗谷たちの急進的な行動は「年少の輩、治を致すを急ぎ、速やかにせんと欲するの弊無くんばあらず」とのように、また「旧臣の擯ぞけられし者、職を失い快快と」し、密かに報復の機会を虎視眈々と伺い、「百計し隙を伺い、罔極の讒を構成」しようとしているように見えたのではなかろうか。栗谷たち年少士林派たちの急進的な行動は、趙光祖の二の舞になりかねないと、老儒退溪は危惧していたように思われるのである。このような不安定な権力状況の中での改革の主張は、退溪には危ういものと思われたであろう。

軍制改革、士禍に関する歴史の見直しと具体的な措置などをはじめとした行政課題の提示と実行要請という点において、士林派の中でも栗谷は急進派として、退溪は穏健派として突出しており、全く対照的であった。

#### (4) 冊封体制

退溪と栗谷が朝鮮朱子学の双璧であり、その学問は理気論によって総括される。実は、二人の理気論は郷村編成論で見られた全体＝官と地方との関係に対応していた。退溪は朱子同様に理が氣に先行する超越の実体であることを認めており、理の内容は五倫（君臣、父子、兄弟、夫婦、朋友）であるため、君臣の義の絶対性を是認していた。そして、郷約などにおいては理気論に対応するように、国法を遵守し、在地士族の賤人に対する裁判権は全面的に認めるものの、良人に対する裁判権は一切認めなかった。官＝統一権力と在地士族＝地方との関係では地方の中央への服従、臣下の君主への服従が説か

(35)『栗谷全書』二、345頁。巻35、行状、9張。

(36)注(34)参照。

れていた。他方、栗谷は理が氣に先行する超越の実体であることを否定し、君臣の義の絶対性に制約を付していた。そして、郷約などにおいても官の絶対性に制約を付し、下人（良人・賤人）に対する在地士族の裁判権を答40以下のことに限り認め、官権に制約を付している。二人の理氣論は郷村と中央との関係に一致していた<sup>(37)</sup>。ところが、理氣論と郷村編成論に従えば、退溪は集権的な方向へ、栗谷は相対的に分権的な方向へといくであろうが、今まで見てきたように、権力論では二人は共に紀綱の回復＝集権を求めながら、栗谷の方が行政課題に対応してより集権的なのである。何故にこのようなことがおきているのであろうか。

退溪が南北の外敵への警戒を表明しつつも、それに対応した軍制改革、権力主体の改革を実行しようとしなのは、朝鮮のもうひとつの隣国、西北の中国との関係があったように思われる。中国＝明との関係について退溪は、明を「大明」、「上国」と呼び、天下の支配者であることを認め、この冊封関係を肯定していた。

『天に二日無く、民に二王無し』、春秋の大一統は、乃ち天地之常経なり、古今之通義なり、大明は天下の宗主為り、海隅より日出でて臣服せざるなし<sup>(38)</sup>

冊封体制に入った朝鮮は実質的には独立国であるが、形式的には中国領の一部となるため、第三国が朝鮮に対して攻撃を加える場合、中国の援軍が期待できるのである。事実壬辰（1592）年の日本による侵略の際は明が援軍を派遣してきた。このような冊封体制という国際的安全保障体制に退溪は朝鮮の安全保障を委ねていたのである。退溪における君臣の義の絶対性は、中国皇帝＝君主と朝鮮国王＝臣下との関係に適合していたのであろう。どこまで自覚的

であったかを別にすれば、これは退溪に特有のことではなく、当時の士林派の多くも類似の状態であった。それゆえに、朝鮮の独自の国防体制の整備、軍制改革を主張した栗谷が、過激な人として浮き上がったのであろう。

しかし栗谷も明との冊封関係を肯定しているが、彼の主観の中で、いくら中国への臣従に対して反感を膨らませようとも、現実に冊封体制以外の安全保障体制を見いだせず、朝鮮の国防が解体しているという状況では、責任倫理の人である限り冊封体制を肯定・利用する以外にないことも当然であった。

「臣聞く『下の上に事えるは、夷險を以てその心を易えず、盛衰を以てその礼を廃さず』と。能く此を行なうは、惟我が国家の中朝に事えること、是なり。……今は夫れ、小を以て大に事え、君臣の分已に定まれば、則ち時の艱易を度らず、勢いの利害を揣らず、その誠を尽くすに務るのみ。』<sup>(39)</sup>

#### IV. 結 論

朝鮮王朝は明との冊封体制に入り、安定と平和を享受していた。そのため南北の外敵の存在にもかかわらず、多くの者たちは本格的な侵略を受けることはないであろうと考え、冊封体制からもたらされている平和に安住していた。その結果、朝鮮王朝を統一権力たらしめる行政課題＝外敵の侵略への対処が等閑視され、統一権力は空洞化していったのである。朝鮮国王は、この行政課題の空洞化という状況下で、求心力を失い、統一権力の実権は王族や有力な臣下に分散し、その間で権力闘争が絶えることがないという、非常に不安定な権力状況にあった。そのような権力状況の中で、改革を求める理想に

(37) 前掲拙稿「李退溪の郷村・地域編成論」。

(38) 『退溪全書』一、260頁上段、巻8、55張「禮曹答日本国左武衛將軍源義清」。

(39) 『栗谷全書』二、535～6頁。拾遺巻4、貢路策、11～12張。

燃えた趙光祖たち年少の士林派官僚が改革に手をつけようとしたこともあったが、勲旧派からの反撃、流血の弾圧を呼び起こし、士禍の犠牲となってしまった。不安定な権力状況の中での制度改革は、むしろ一層の不安定化をもたらし、権力闘争を激化させてきたのである。退溪が生きた、16世紀の朝鮮王朝はこのような政治状況の中にあった。

退溪の上奏文では、王族や有力な臣下の間の権力闘争の芽を未然に防ぐための対応にほとんどの議論が費やされ、行政課題は第二義的なものでしかなく、軍制改革や士禍の歴史的評価の見直しも含めた権力主体の改革には極めて消極的であった。このような政治状況の中でいかにして朝鮮王朝に安定をもたらすべきか。退溪は、理が氣に先行する超越的実体であることを主張

し、君臣の義の絶対性を主張していた。このような君臣の義の絶対性を含む五倫の道徳が士族たちの心の中に内面化されていくとき、朝鮮国王は求心力を回復し、権力闘争は沈静化していくであろう。退溪にとっては、制度改革の主張は新たな士禍を呼び起こす可能性の高いものであり、当面は自国の安全保障を冊封体制に委ねつつ、士族の心の中に君臣の義をはじめとした五倫、朱子学的徳目を内面化していくことこそが、長期的に見て朝鮮王朝に安定をもたらす最も確実な政治的实践であったと判断していたのではなかろうか。退溪における政治的発言の少なさと地方での朱子学的研究や講学活動への尽力は、退溪にとっての政治的实践そのものであったと思われる。